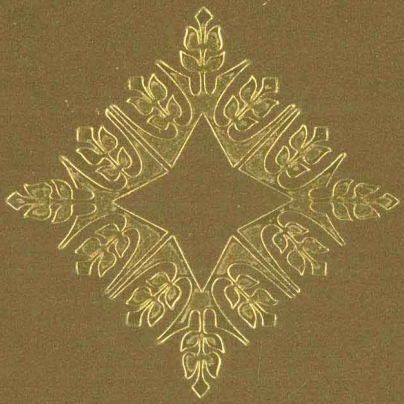


昭和萬葉集

昭和三十年～三十一年

巻十一

講談社

昭和萬葉集　巻十一

定価　一、六〇〇円

昭和五十四年十一月二十八日　第一刷発行

発行者　野間省一

発行所　株式会社講談社

東京都文京区音羽二―一二―二一

郵便番号　一一二

電話　東京(〇三)九四五―一一一一(大代表)

振替　東京八―三九三〇

印刷所　凸版印刷株式会社

製本所　牧製本印刷株式会社

用紙　本州製紙株式会社

王子製紙株式会社

製函　株式会社岡山紙器所

©講談社　一九七九年　Printed in Japan

0392-441115-2253(0)（昭萬）

落丁本・乱丁本はお取りかえいたします。

昭和萬葉集　巻十一／目次

口絵
凡例

I

基地反対の嵐
砂川闘争 10
沖縄で 14
沖縄を思う 16
基地反対闘争 18
オネスト・ジョン 20
基地の光景 21
基地の周辺 23
戦力なき軍隊 25

原爆許すまじ
水爆実験 27
死の灰 29
放射能の雨 31
怒りの声 33

原爆の後遺症 35
被爆の記憶 37
原爆許すまじ 38
広島にて 39
長崎にて 40
人間家族展 40
原子力研究所 41

世界と日本
日中の関係 41
日ソ国交 43
スターリン批判 43
徳田球一の死 45
六全協の衝撃 46
政治の姿 47
世界の動き 50

II

戦後は終ったか
戦後の日々 54

テレビと電化 56
化学繊維 58
太陽族 59

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

風俗・スポーツ　60
新しい文化　61
うたごえ運動　63

いまわしい記憶
兵たりし日を　64
戦時下追想　66
戦傷のあと　67
それぞれの傷　68
還らぬ人々　72
抑留と引揚　75
遺骨収拾　77
戦犯　78
親探し・尋ね人　79

きびしいくらし
きびしいくらし　80
闇米　83

貧しい食事　83
衣料不足　85
職をもとめて　86

生活の周辺
朝鮮人として　87
わが日々　88
日常折々　91
身辺のいきもの　94
酒の歌　95
生活の周辺　96
都市の抒情　98

日本さまざま
マナスルと南極　102
火星大接近　103
さまざまな事件　103

III

はたらく人々
職場にて　108
仕事を終えて　109
メーデー　110

デモ　111
団交　113
闘争　113
馘首　115
オートメーション　117

思想への架橋 117

仕事の歌
炭坑で 119
鉱山で 121
工場で 121
工員たち 123
鉄道員 124
バス 126
土木・建築 126
ニコヨン 128
海上で 129
教師の歌 131
生徒よ 133
医師 135
警官 136
新聞記者 137
仕事の歌 138
商いの歌 141

農村の日々
米作り 143
水あらそい 145
農作業 145
家畜 147
農家も貧し 149
農に生きる 150
農村の日々 150
山の仕事 152

合同歌集の盛況
『走行粁』より 153
『歌にみる日本の労働者』より 155
『陸の中の島』より 158
『あらくさ』より 161
『無影燈』より 162
『葦』より 164

IV

愛の歌
愛のよろこび 168
愛のかなしみ 172

愛と死
夫よ 175
夫を悼む 177

妻よ 179
妻を悼む 182
離別 182
みどりご 183
幼な子 185
わが子 187
病む子 190
子の死 191
子を悼む 193
父を 194
父を偲ぶ 196
母を 197
嫁と姑 201
兄弟姉妹 202
家族たち 205
友 206
太田水穂の死 207
会津八一の死 208
亡き人を偲ぶ 209
青春の歌
学生生活 210
青春の日々 212
病み臥して
病床の日々 214
静臥 219
手術 221
ストマイ 222
貧しく病みて 223
病者の愛 225
ハンセン氏病者 227

V

四季の移ろい
早春 232
春 233
若葉 235
夏 235
秋 238
冬 241
雪 243
冬木立 244
歳暮・新年 246
くさぐさの歌
海 247

川 249
山 249
鳥 252
動物 254
花・草・木 255
旅の歌 259
ふるさと 264
外地の旅 264
外地に歌う 265
獄中にて 266

折々の歌
老境 267
祈り 270
書物の周辺 272
学芸に生きる 273
女の心 273
日々の感慨 276
日々の詩情 278
新しき歌 283

民衆短歌の結集〈昭和短歌史概論〉……286
もはや「戦後」ではない〈昭和史私論〉——山田宗睦……292
年表……304
作者略歴・索引……307

脚注目次

〈基地反対の嵐〉
五五年体制の日本——10
砂川基地反対闘争——11
プライス勧告と沖縄闘争——14
『暁雲』——15
基地反対闘争——18
オネスト・ジョン——20
鳩山内閣——26
鳩山改憲発言——27
〈原爆許すまじ〉
放射能の恐怖——31
放射能症——32

第一回原水爆禁止世界大会——33
日本原水協の結成——34
ザ・ファミリー・オブ・マン写真展——40
原子力基本法——40
原子力研究所——41
〈世界と日本〉
日中関係——42
日ソ交渉——43
スターリン批判の波紋——44
共産党六全協——46
社会党統一——46
保守合同——47
乱闘国会——48
米英仏ソ巨頭会談——49
バンドン会議——50
スエズ戦争——51
ハンガリー事件——52
〈戦後は終ったか〉
「もはや戦後ではない」——54
テレビ時代の到来——57
太陽族——59
スポーツの多様化——60
労音・うたごえ運動——63
青年の生活——64
〈いまわしい記憶〉
戦記ものの流行——68
引揚——76
遺骨収拾——77
戦犯釈放——78
東京ローズの出獄——79
〈きびしいくらし〉
家計収支——80
生活保護——81
米価——83
十円牛乳——84
衣料の需給——86
就職問題——87
〈生活の周辺〉
在日朝鮮人——88
新生活運動——91
国勢調査——92
ボタ山崩れ——97
都市の変貌——99
〈日本さまざま〉
マナスル初登頂——102
南極観測隊出発——102
紫雲丸事故と参宮線事故——103
相模湖の惨事——104
森永砒素ミルク事件——105
ペニシリン・ショック死——105
〈はたらく人々〉
春闘——111
神武景気——112
輸出船ブーム——113
景気好転とPR——115
生産性向上と技術革新——117
珪肺法——120
鉄道の復興——125
自動車の普及——126
土木建設工事——126
『青空の下に』——128
「うれうべき教科書」——132
日本高等学校教職員組合——133
〈農村の日々〉
農業生産力の向上——144
畜産経営——147
木炭——152
〈合同歌集の盛況〉
『走行粁』——154
『歌にみる日本の労働者』——156
『陸の中の島』——159
『あらくさ』——162
『無影燈』——163
『葦』——164
〈愛と死〉
無痛分娩——183
日本母親大会——189
〈青春の歌〉
学生生活——210
〈病み臥して〉
療養所——214
医薬分業——222
国民皆保険——223

1本全集は、昭和元年から五十年までの間につくられた短歌を対象として、一般投稿歌、依頼出詠歌、各種資料からの発掘歌等々を、選者の選をへて編纂した。

2収録作品は、作歌年（作者本人の申告もしくは初出掲載誌発刊年等）によって分類し、年代順に巻分けを行なった。

3各巻内は、作品のテーマ、素材により分類・配列した。また分類ごとに初出作品の上段に、色刷で編集小見出をつけた。

4作者名の下に、生（没）年、出典、小題等を必要に応じてつけた。

・収録作者全員の作者略歴・索引を巻末につけた。

・生年または現存（没年）が未詳の場合は…で示した。

〔例〕大8…〈生年のみ判明〉
…昭26〈没年のみ判明〉

・出典は、原則として編纂部が典拠としたものを示した。『　』は歌集、「　」は新聞・雑誌などを、また（　）内の数字は、刊行年、刊行年月（日）号を示す。

〔例〕『形相』（23）〈昭和二十三年刊〉
「アララギ」（17・2）〈雑誌「アララギ」昭和十七年二月号〉
「朝日新聞」（17・12・8）〈昭和十七年十二月八日号〉

・二首以上の収録作品で、出典が複数となっている場合の表示。

〔例〕「アララギ」（17・9、10）〈九月号と十月号〉
「アララギ」（17・9）＝三首（18・3）＝二首〈十七年九月号から三首、十八年三月号から二首〉

・必要に応じて、出典の下に原典につけられた小題を付した。

〔例〕『露原』（22）―食生活〈歌集『露原』にある「食生活」という小題のついた一連からの抄出〉

・必要に応じて、作歌時の所在地、未発表作の典拠等を〈　〉内に記した。

〔例〕〈北支にて〉〈日記より〉
〈沖修二『阿南惟幾伝』（45）より〉

5戦後の現代かな使いによる作品を除いて、作品の表記は旧かな使いを原則とした。なお、漢字は原則として新字体を使用し、よみがな（ルビ）は編纂部の判断で加減した。

6作品の下段に色刷で脚注欄を置いた。

・昭和史事項、短歌史事項の解説脚注は、太字（ゴチック体）で見出をつけた。なお（　）内は執筆者名。

・作品中の難解語、特殊用語、古語、誤解を生じやすい語などに語注をつけた。

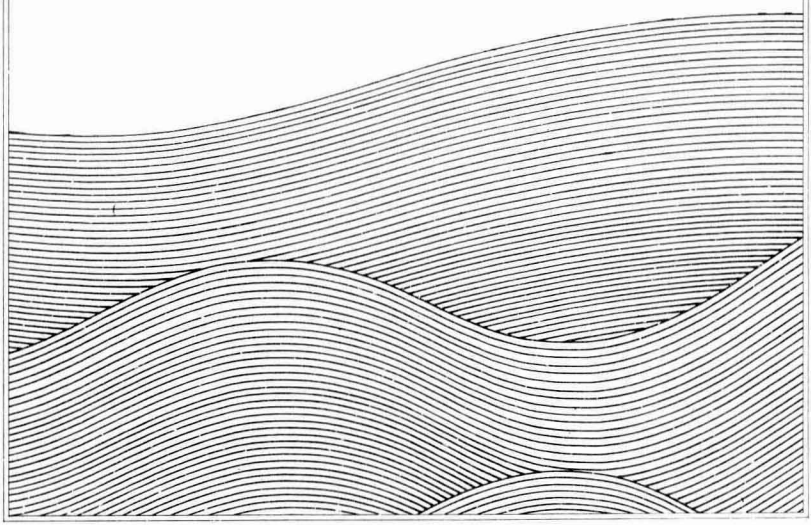
・収録作品につけられていた詞書は、必要に応じて〔詞書〕と頭につけて脚注欄に引用記載した。

・検索しやすいように、作品の末尾と該当する脚注の頭に、＊または＊＊をくりかえし付して、対応させた。

■本巻収録の作品の作者・著作権者で、所在不明等のため、連絡のとれない方があります。巻末作者略歴・索引の＊印を付した作者がこれに該当しますが、お心あたりの方は、編纂部まで御一報くださいますようお願いいたします。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

I



基地反対の嵐

吉村睦人　昭5～　合同歌集『貯木池』(45)

叫び合ひもつれあふわれらを柵の中に笑ひつつ見てゐるアメリカ兵ら

石川　泉　昭9～「まひる野」(30・11)

ピケ隊を断たんと寄り行く一隊も同胞なり皆争ひの中*

石川　誓　昭6～「未来」(30・10)

風吹く午後をしきりに基地拡張に争う砂川町の半鐘聞ゆ**

中出美貴江「まひる野」(30・11)

先祖より受けつぎし墓飛行場にできるものかと老いたる農夫

宮本郊二「短歌」(31・5)

踏み乱し陸稲(おかぼ)の畑に杭を打つ一隊に土を放(な)げつつ叫ぶ*

高浜平七郎「未来」(31・12)

軍用トラックに揺らるる顔を打つ並木きれぎれの記憶砂川の道

五五年体制の日本　戦後一〇年を経て、日本の国内体制はさまざまな意味で、戦前の水準との比較が行なわれるようになった。生産力、輸送力の回復はもっとも顕著で、これにともない国民生活の物質面における水準は、すでに戦前を凌駕したともいわれた。しかしその反面で日米安全保障条約による、いわゆる安保体制は、日本の国際的地位はもちろん、国内における政治体制にも影響をあたえていた。こののち日本はアジアにおける孤立化の方向に進み、同時に保守政権体制の固定化が強まる。一九五〇年代後半のこのような動向は、戦後一〇年のこのころからはじまったのである。(原田勝正)

*ピケ隊＝ピケット・ライン。ここでは強制測量を阻止するための横隊。
同胞＝同じ母から生まれた兄弟姉妹、また同国民。
**半鐘＝合図・警報のために監視やぐらに取り付けた小さな釣鐘。
*陸稲＝畑地に栽培する稲。

中村喜良雄　大5～「まひる野」（30・11）

砂川の土深く杭打たるるも心に杭は打たるるまいぞ

上村みのる「未来」（31・1）

測量を拒みつづけし昂ぶりも徒労となるか吾ら懼（おそ）れいし

三枝邦彦　昭5～「アザミ」（31・11）

測量は中止されたり砂川の雲白き空に秋雲雀（あきひばり）鳴く

近藤芳美　大2～「未来」（31・11）

救援を求め其の夜の街に立つ傷つくものら雨に濡れつつ

人の憎悪ここに聞えず降り出ずるしぐれのはての砂川のこと

脇坂高国　明44～「コスモス」（31・1）

一本の杭を打つ音グワングワンと砂川の町よりひびきてやまず

前田　透　大3～『断章』（32）

拒否の旗土より立てるところ行き芽生えし麦を踏まざらんとす

筑波杏明　大13～「まひる野」（30・11）『海と手錠』（36）＝四首

砂川基地反対闘争　鳩山内閣は、米軍に対し、立川、横田、小牧、木更津、新潟の各空軍基地を、原爆用大型爆撃機が使用できるように拡張することを約束した。これらの基地周辺では、昭和三十年からはげしい反対運動が開始された。地元はどこも予備計画の実施を拒否、とくに立川基地の拡張部分にあたる東京都北多摩郡砂川町では五月、町議会が全会一致で拡張反対を議決した。九月十三日政府は一七〇〇人の警官を動員して測量杭を打ち、地元では支援労組を含め約四〇〇〇人がこれを阻止しようとし、九〇余人の重軽傷者を出した。十一月五日には細密調査が行なわれ、警官五〇〇人と支援労組員二〇〇〇人が衝突、一〇〇人以上が負傷した。運動を支援してきた社会党と総評とは方針を変更し、現地闘争を中央交渉に移そうとした。昭和三十一年九月政府は土地収用認定書を送達、地元住民の反対運動は再燃し、十月強制測量に対し、地元民、労働者、学生が結束、十二、十三日の二〇〇〇人の警官隊による襲撃を撃退、十四日政府はついに測量を中止した。（原田）

うばはれし土地を返せと云ふこゑのすでに哀しみを越えてたたかふ
悩みつつ来しさびしさは告げざれば勇みてゐると思はれてゐむ
鉄かぶとのひさしに涙かくしつつ崩さねばならぬスクラムにたつ
ふるさとのわが母ほどの老(おい)が組むスクラムなればわれはたぢろぐ
泥濘(ぬかるみ)に映るわが影憎まれてさみしき顔と思ひ見てたつ

松田嘉与子「新暦」(31・9)

有刺鉄線の外に緑の色あせて砂川が見える日本が見える

赤羽洋子「未来」(31・12)

莚(むしろ)の上傷つきし労働者並び臥す涙堪えて治療を続く
怪我人は警察で治療すると云うを恐れて創(きず)を化膿さす農夫*

古川哲史　明45〜

つとめなれば講義をぞする砂川に出むきてのこるもの少なき教室に

蔵本博美「塔」(31・12)

授業さきて砂川の闘いを語りゆくにうとましき眼が吾を見返す

*化膿＝傷口が炎症をおこしてうみをもつこと。

黒住嘉輝　昭9～「塔」(31・12)

砂川に守り得しものとたぎちくる我スクラムを組み得るや否＊

根本　篤　大8～「コスモス」(30・12)

強制測量をはばまむとする砂川町の声生々し録音ニュースに

草野ゆかり「コスモス」(30・12)

基地に争ふ吾同胞と米兵の懈(たゆ)き表情をニュースは捉ふ

赤羽豊美　昭7～「まひる野」(31・2)

作物を踏み荒らしふみあらし杭打つと悲しみ透るニュウスを聴けば

岸上大作　昭14～昭35「高校時代」(31・3)

砂川のニュース聞きつつ妹と声合わせて歌う「民独」のうた＊＊

高津明児　昭3～「アララギ」(31・3)

応援の労組去りたる砂川をピースフルタウンと説く英語のニュース＊

志木寥波「新日本歌人」(31・10)

フィルムの切れたりしかば暗黒より聞え来る砂川町にあぐる怒声が

＊たぎちくる＝心がたかまってくる。

＊＊「民独」のうた＝昭和二十五年に発表された「民族独立行動隊の歌」。きし・あきら作詞、岡田和夫作曲。「民族の自由を守れ」にはじまる。

＊ピースフルタウン＝平和な町。

比嘉美智子　昭10～『月桃のしろき花びら』(49)

二十歳になりて先づ得し吾が権利基地化反対運動に堂々と署名す

阿波根昌輔　昭4～「アララギ」(30・3)　合同歌集『暁雲』(31)

見はるかす残波岬に白波の高く上りて砲のとどろく＊

戦争の犠牲者多き伊江島が軍用地接収にて又苦しむか＊＊

兼城　弘　「アララギ」(30・4)

春日の下干潟は輝らふ北谷の浜米軍ここより勢ひ上りき＊

原田道雄　大2～　合同歌集『暁雲』(31)

苦しみて今日を生き抜き来し島にオネストジョンの試射がはじまる

松田守夫　「アララギ」(31・11)

露はなる圧力の前に堪へざりき次々に出づる謝罪声明

藪増哲夫　「らせん」(31・10)

少年の腹へりて自が畑の芋盗むにあらざれど射殺されたり

春山行夫　「アララギ」(31・7、10)

＊残波岬＝沖縄県、沖縄本島の中部、中頭郡にあり東シナ海に面した岬。

＊＊伊江島＝沖縄県国頭郡の一部。東シナ海に浮かぶ隆起珊瑚礁からなる島。

接収＝権力による強制的取り上げ。

＊北谷の浜＝沖縄県、沖縄本島、中頭郡にあり東シナ海に面した村。

プライス勧告と沖縄闘争　沖縄における米軍の軍用地接収問題について米下院軍事委員会は、一九五五（昭和三十）年十月メルビン・プライス議員を団長とする七人の視察団を沖縄に派遣、翌年六月八日プライスは同委員会に報告書とともに一項目の民政府に対する勧告案を提出した。その内容は、沖縄米軍基地の継続使用の必要性、土地新規接収の必要性、接収地に対する補償の一括払いにより、所有権獲得をはかるなどであった。当時米軍接収地は約一万六〇〇〇ヘクタール、島の総面積の一三パーセントにあたり、勧告案は、米軍が計画中の同程度の面積の接収を認めることになった。六月六日米民政府は、プライス勧告を発表、住民は失望し、不安を抱いた。十一日琉

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com